

そして脚をM字型に情けなく押し開かれた瞬間、奈央はあまりの羞恥に気絶しそうなほどの目眩を覚えた。十七年間生きてきて、今まで誰にも見せたことのなかった女の子の一番大切な部分を、後輩の卑劣な少年に視姦されているのだ。

しかもその様子を琴音や桐子に見られていると思うと、死にたいほどの羞恥はさらに増幅されてしまうのだ。

「ああ……いい、いやあ……」

ヴァージンピンクの花びらと、その下の少しくすんだ穴まで、恥ずかしい淫部のすべてを隅々まで見られてしまっている。

「おい奈央、オマ×コ濡れてるじゃねえか、乳首がそんなによかったのか？」

「そ、そんなこと——ひゃうッ！」

否定の言葉が途中から甘ったるい悲鳴に変わった。

貴志が極限まで膨張した肉亀を、ヴァージンの割れ目にぬちゃっと押し当ててきたのだ。その瞬間、男の先走り液だけでは決してたつことのない水音が、誰の耳にも聞こえるくらいはつきりと響き渡った。

執拗に身体中をなぶらめられつづけたせいで、ヴァージンなのに秘園をじつとりと濡らしってしまったのだ。恥ずかしい秘密を暴かれた奈央は、はか破瓜の恐怖と泣きたいくらい

羞恥に、弱々しく頭を振っていやいやを繰り返す。

「こんなに濡らしやがって。誤魔化そうとしても無駄だぜ、この浮乱が。おらっ！」

「あつ……ヒッ！」

奈央のひきつった声。凶器の先端がついに泥濘でいねいに沈みこんだのだ。

「ひッ、い、いやッ、ちよつと待って！」

「もう待てねえ、犯りてえんだ。ミシエルの救世主様とオマ×コしてえんだよっ！」

これだけの美少女を前にして貴志も相当高まっていたのだろう、ペニスの先端で処女地を感じると、もう歯止めがきかなくなった。

「破ってやる、オメエの処女膜、俺様がブチ破ってやるよおつ、ウリヤッ！」

「きひいッ！ あッ、ぐうッ……」

貴志が雄叫びをあげて腰を突きこんだ瞬間、身体の奥でブチッと音がして、目の前が真っ赤に染まった。身体を内側から引き裂かれるような激痛に、きつく閉じた目尻から涙が滲む。

「おおうっ、やったぜ、あのクソ生意気な麻生奈央のヴァージンを破ったんだっ！」

自分のことを散々コケにしてきた少女をレイプしていると思うと、興奮はさらに高まっていく。目を血走らせて全身の筋肉を隆起させながら、痛いほどに勃起したペニ

スをグイグイと処女穴にねじこんでいく。

「ひいッ、い、痛いっ……あひッ……」

普段の凜とした美少女の美貌は、見る影もなく苦痛に歪み、震える唇からは情けない声がもれつつづけている。目尻から溢れた涙がこめかみに流れ落ちていく様が、レイプでヴァージンを散らされた少女の悲しみと悔しさを物語っている。

いつも強気な奈央のそんな儂げな姿が、男たちの獣欲を危険なほどにふくれあがらせて暴走させていく。

最悪の処女喪失のショックと激痛に、意識が遠のきそうになったそのとき。

「キヤッ！ やっ、いやですっ、やめてえっ！」

愛しい少女の悲鳴が、奈央の鼓膜を震わせた。

「し、琴音……」

恐るおそる目を開いて首をねじると、なんと後ろ手に縛られた琴音の背後から、全裸の岩田が覆いかぶさっているではないか。

「ああっ、お、お姉さまっ、助けてっ、助けてくださいい」

うつ伏せになって、お尻を大きく後ろに突き出す姿勢を強要されている。横に向けられた顔を絨毯に埋めて、肩と膝で身体を支えて背中を大きく弓なりに反らしている。し

かもパンティを剥きおろされて、白桃のようなお尻をがっしりとつかまれているではないか。今まさに、犯される瞬間なのだ。

「ああっ、琴音っ！ 約束が違うわ、琴音には手を出さないって言ったじゃない！」
奈央はレイプされながらも、琴音のヴァージンを守ろうと必死に抗議する。しかし貴志は勝ち誇ったような高笑いをもらすのだ。

「ウハハッ、バカな女だぜ。俺たちがそんな約束を守ると、本気で思ってたのか？」
「そ、そんなっ……代わりにわたしをっ！ 琴音は助けてあげてっ！」

「うるせえんだよっ、オラァッ！」
なかほどまで啜くわえこまされていた剛直を、一気に根元まで叩きこまれる。

「きひいッ！ い、痛っ、痛いっ！」

「お姉さまっ、いぎッ！ あッ……い、いやっ、助けっ……あぐうッ！」

奈央が子宮口を突かれる痛みに喘ぐのと、琴音の舌足らずの悲鳴が響いたのはほぼ同時だった。

「琴音っ……ああ、琴音えっ」

「ひ、ひいッ、お、お姉さまっ……ひんッ、奈央お姉さまあっ」

奈央が屈辱の涙を溢れさせながら愛しい少女の名前を呼べば、琴音も涙で顔をグシ



ヤグシヤにしながら大好きなお姉さまの名前を叫ぶのだ。

「貴志い、このアマ、やっぱチビだけあって穴もきつきつだぜえ」

「へへッ、そうかい。こつちも具合いいぜ、ぐいぐい締めつけてきやがる。処女はこれだからやめられねえ、朝まで犯りまくってやるぜ」

本性を現わした二匹の鬼畜に、純真無垢な二人の天使が穢けがされていく。

少女たちの股間に極太のペニス突き刺さり、破瓜の血があたりに飛び散る。それでも鬼畜たちは激しく腰を打ちつけ、天使たちの唇から悲鳴と涕泣ていきゅうを絞りださせるのだ。

「ひんッ、痛いッ、ああッ……お姉さま、助けて、お姉さまあ」

「はんッ、はんッ……琴音、許して……ああッ、琴音え……あひいッ」

奈央は激しい凌辱を受けながら、琴音を救えなかつた罪悪感に涙する。すると琴音もお姉さまの涙に感化され、新たな滴で頬を濡らすのだ。

「おうっ、奈央、そろそろだぜ」

「お、俺ももうすぐ出そうだ、よおし、オマ×コの奥にブツかけてやるっ」

男たちは欲望のままに腰を振って、少女たちの穢れなき肉体を貪り、ついにその処女肉のなかで射精を開始する。